

大阪商業大学学術情報リポジトリ

2017～2018年度アミューズメント産業研究所プロジェクト研究 将棋の効果的指導法と教育効果に関する研究——将棋教室、将棋指導における長期間にわたる活動から得られた事例と分析（要約）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2020-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古作, 登, 小田切, 秀人, 川崎, 一克, 寺谷, 睦, KOSAKU, Noboru, ODAGIRI, Hideto, KAWASAKI, Ikkoku, TERATANI, Mutsu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/885

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



2017～2018年度アミューズメント産業研究所プロジェクト研究

将棋の効果的指導法と教育効果に関する研究

——将棋教室、将棋指導における長期間にわたる活動から得られた事例と分析（要約）

※研究の詳細は紀要別冊として刊行

古 作 登
小田切 秀 人
川 崎 一 克
寺 谷 睦

序章 本研究の目的（古作 登）

将棋の参加人口は2018年発表のレジャー白書によれば約700万人、体を使うスポーツではゴルフ人口（670万人）に近い。ゴルフの指導法に関してはさまざまなレッスン書が出版されており、また練習場に付帯したゴルフ教室や、メディアで活躍するレッスンプロの数も少なくない。対照的に、将棋の指導法やその教育効果に関する研究は、かなりのニーズがあるにもかかわらずこれまでほとんど発表されることはなかった。

筆者は2009年に「将棋普及に関する一考察——児童・生徒への効果的指導法」（大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要第11号に収録）、2015年に川崎大地（一克）氏、寺谷睦氏と共同で「子どもとおとな、将棋能力の学習と発達～どのように学ぶか、なぜ子どもは伸びるのか、おとなでも早く上達することは可能か」（『子どもと発達発達』13巻3号 日本発達発達学会・編 杏林書院・刊に収録）を発表した。

前者は小田切秀人氏の著作『将棋の教え方学び方』に啓発されてのものであるし、後者はデータを基に、上達の傾向において子どもと大人にどのような差異が見られるかの研究である。集められたデータは決して十分な数とはいえないが、低年齢層で飛躍的な上達を果たす子

どもの特徴や、上達に時間のかかる子供の特徴など一定の傾向があることがわかった。

筆者は将棋において、早い上達を目指すのならば一歳でも若い方にアドバンテージがあると考えているが、大人であっても効率的な学び方をすることで、何歳になっても高段を目指すことは十分可能であると信じている。

それはそれとして、将棋界では2016年に14歳の史上最年少でプロ入りした藤井聡太四段（2019年1月現在・七段）の登場以来、これまで以上に若年層のブームが起き、各地のこども教室は受講者定員を超えたため新規受付を一時的に停止しているところもあるという。

今回の研究では、児童・生徒への指導が約20年と経験豊富な指導棋士、普及指導員のノウハウを集約し、応用範囲の広い指導法を紹介した。講義の方法についてはこれが絶対に正しいという方法は将棋界ではまだ確立されておらず、また本プロジェクト研究の代表者で全国各地の指導現場を視察した筆者の私見では絶対的なメソッドは存在しないと考える。それでも、各執筆者が長年の経験で効果のあると思われる方法を公開したことで、将棋指導に携わる指導者やこれから取り組もうとしている人にとって、有意義な情報を提供できたと信じている。

第1章 入門者を対象とした「どうぶつしょうぎ」と「青空将棋」の効用と指導のポイント（寺谷 睦）＊要約

1-1 指導のコンセプト

◎将棋について

将棋は、礼儀作法を含め非常に教育的価値の高い日本の伝統文化であると言える。しかもルールさえ覚えれば異年齢層の方々や異国の方々とも交流できるコミュニケーションツールでもある。最近では、カロリーナ・ステチェンスカ女流1級が海外から来日した史上初の女流棋士として話題になった。

今まで保護者の転勤によって遠方へ転居した生徒もいるが、海外へ転居する生徒には、日本将棋連盟が発行している英語版の将棋のルール解説した印刷物を持たせて送り出した。

海外でも将棋やチェスを通じて早く友達を作って欲しいという願いと日本の民間文化交流大使になって欲しいという願いを込めてである。

国内の転居でも将棋を通じてすぐに友達ができましたと嬉しいお知らせを頂いたこともある。

将棋を通じて仲間の輪が広がり、人格形成の上で役立てば指導者としてこの上なく嬉しい。

◎「負けました」の大切さ

将棋は、負けた人が自分で「負けました。」と言わないと終了しないゲームである。ほとんどのスポーツには、審判がいて審判が勝ち負けを判定する。しかし、将棋には、審判はいないので、自分で自分の負けを宣言しなければならない。プライドの高い人には、つらいことである。

以前、指導対局を受けている子どもが、詰んでいる局面で「負けました。」を言えずに固まっていた。その先生は、子どもが「負けました。」と言えるまで、根気強く待たれていた。気持ちの整理ができた後ようやく「負けました。」と言え、「よく言えたね。」と先生がきちんと褒めることを忘れなかった。

自分の弱い心に勝つことも将棋では、重要。これが心の成長につながる。

◎将棋上達の流れ

作戦を考える→対局する→対局を振り返る（敗因・勝因を分析する）→対応策を考える。

Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Action（改善）

これを繰り返し、訓練することは、いわゆる PDCA サイクルを回すことであり、大人になって仕事をする上で、大きな力となる。

◎将棋教室のコンセプト

「将棋の幼稚園・小学校」

私は、将棋の棋力は、プロの先生には遠く及ばない。したがって小学校教員の経験も生かして将棋の初心者・初級者に将棋のルールからわかりやすく指導し、将棋の普及に重点を置く。理想は「教育将棋」としての教室。

基本的に幼稚園・保育園年中から高校生までの初心者から級位者を対象にしている。静かに1人で座ることができ、集中力と理解力があれば、幼稚園・保育園年少でも入会可能であるが、過去8年間で、年少の入会実績は、1人。

年中では、誕生月によっても集中力や理解力にばらつきが著しいので、体験教室の様子を見て「1年後にもう一度来て下さい」という場合もある。年長になれば、集中力と理解力がかなり向上するので、ほとんどの入会希望者を受け入れている。

「将棋の幼稚園・小学校」が基本コンセプトなので、わかりやすい言葉を使うようにし、道具もどうぶつしょうぎ・ごろごろどうぶつしょうぎ・矢印付きの駒などを駆使し、第1関門のルールの理解でつまづかないように心がけている。囲碁の場合、9路盤→13路盤→19路盤とステップがあるのと同様である。

◎普及の課題

藤井聡太七段の活躍により、今まであまり将棋に興味がなかった方にも将棋が注目されるようになった。いろいろな方にも声をかけられるようになった。

しかし、興味を持った方が、全て将棋教室に来るわけではなく、学業やスポーツなどで退会者も多く、大阪府内で私の指導している将棋教室の生徒数は、微増程度である。私が指導している在籍生徒の年齢層の分布は、次のとおりである。

幼稚園児・保育園児 5 %

小学1年生～3年生 47.2 %

小学4年生～6年生 39.4 %

中学生 7.8 %

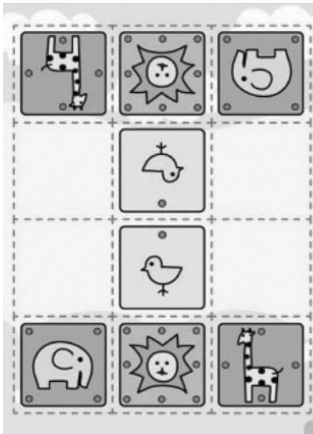
高校生 0.6 %

男女比は男の子 88.9 % 女の子 11.1 %

上記の通り、小学校低学年以下が半数以上を占めているので、特に平易な言葉で分かりやすく指導することが求められる。中学生以上の在籍生が1割に満たないのは、この数字を見るだけでもとても残念である（学生の時間的制約）。また男女比も女の子が1割程度というのは、やはり偏り過ぎているので、女の子にも興味を持ってもらえるような工夫と努力が必要だと痛感している。こちらは、もう少し改善の余地があると考えている。学童保育への指導にも行っているが、こちらは、元々男女の混合なので、女の子にも普及できる貴重な機会である。

1-2 入門レベルで「どうぶつしょうぎ」を用いることの効用

最近では、小学校就学前から将棋に興味を持つ生徒が増えている。しかし、まず小学校就学前の生徒に立ち足かるのは、漢字の壁。どうぶつしょうぎ（写真-1）は、その壁が完全になくなっている。かわいい動物のイラストと駒の動き方を示した点印のみで、難しさを感じさ



写真―1 どうぶつしょうぎ

せない。

どうぶつ将棋で教えるポイントは、次の通り。

① ゲームの目的の理解

ライオンを捕まえる（キャッチ）・またはライオンが最前列に到達する（トライ）と勝ち

② 駒の動きの理解

駒に描かれた点印の通り駒を動かしてみる

③ ルールの理解

順番を決める 駒を動かす 駒を取る、駒を打つ、駒を成る（裏返す）

④ 挨拶の指導

お願いします→キャッチ（トライ）→ありがとうございました

どうぶつしょうぎは、ゲームの性質上、「負けました」を言う必要がない(精神的負担の軽減)

◎ポイント

ゲームを通じて、駒の協力の重要性を伝える（一人ぼっち禁止）。これが理解できていないと81マスの将棋になった時も駒をただで取られる手を平気で指してしまう。悪手は、戻しても

う一度考えさせる（慣れるまで）。悪手を戻すことに関しては、賛否両論あるが、初心者は何が良い手か悪い手かわからないので、私は、悪手を指摘する方法を採用している。

◎指導の流れ

悪手が減ってきたら、ヒントを徐々に減らし、「待ったなし」に移行していく。

集中力の様子を見て、疲れてきたら、どうぶつしょうぎの1手詰めやトライ（どうぶつしょうぎではライオンが次の相手の手で取られない状態で相手陣の一番奥まで行くと勝ち）の守り方などの問題を出す。

どうぶつしょうぎをマスター→ごろごろどうぶつしょうぎ・ごろごろ将棋→「青空（歩なし）将棋」青空将棋は、生徒の年齢や理解力を考慮して、必要に応じて矢印付きの駒を使う場合もある。矢印付きの駒の使用に関しては、指導者により賛否両論があるけれども、私の指導実績では、矢印付きの駒を使って、いつまでも駒の動きを覚えられなかった例はない。

学童保育1年生に対しては、表－1のような内容で1年間の指導カリキュラムを進めている。最初の3カ月はどうぶつしょうぎ、次の3カ月は青空将棋。

表－1

学童保育1年生 毎週1回の指導計画 全体指導は、先生対みんなチーム

	5月	6月	7月	8月	9月	10月
指導形式	大盤	大盤	4面	大盤	大盤	大盤
指導形式	全体指導	全体指導	指導対局・大会	全体指導	全体指導	全体指導
種目	どうぶつしょうぎ	どうぶつしょうぎ	どうぶつしょうぎ	青空将棋	青空将棋	青空将棋・1手詰め
指導内容	ルールを覚える	勝つ方法を考える	対局に慣れる	ルールを覚える	良い手を考える	上手に玉を捕まえる
1回の時間	約30分	約30分	1グ ループ 約10分	約30分	約30分	約30分
1ヶ月4回の練習時間	2時間	2時間	40分	2時間	2時間	2時間

	11月	12月	1月	2月	3月	
指導形式	3面	3面	3面	3面	3面	
指導形式	指導対局	指導対局	指導対局	指導対局	指導対局・大会	
種目	青空将棋	将棋	将棋	将棋	将棋	
指導内容	対局に慣れる	玉の囲いをまねる	玉を囲って攻める	玉を捕まえる	総仕上げ・大会	
1回の時間	1グ ループ 約10分	1グ ループ 約10分	1グ ループ 約10分	1グ ループ 約10分	1グ ループ 約10分	
1ヶ月4回の練習時間	40分	40分	40分	40分	40分	14時間

1人当たりの
年間学習時間

◎2011年度～2017年度指導実績

1 年生 平均約20人×7年間＝約140人

1 人年間約14時間の総学習時間で、どうぶつ将棋から将棋までマスター

1 年生は、7月の終業式前後にどうぶつしょうぎ大会、3月の修了式前後に将棋大会を開催し、締め括る。2018年度も約20人の1 年生が学習中。

第2章 「こども将棋教室 棋友館」における指導法（小田切 秀人）＊要約

2-1 漢字が読めない層からの指導

いわゆるボードゲームにはルールがあり、初めて盤駒に接した人が本将棋を指すことは難しい。駒の名前、利き、詰み、反則など対戦できるまでに覚えることが他のゲームに比べて多いからだ。例えばオセロなら、

- ・初期配置に4つ置く
- ・黒と白が交互にチップを置いていく
- ・相手のチップをはさめるマスめに置き、ひっくり返す
- ・最終局面で自分のチップが多い方が勝ち

と基本的なルールは将棋に比べ圧倒的に少ない。初めて接してもすぐに対戦できる。

加えて幼児には駒に書かれている漢字が難しい。成人でも香車を「かしや」、歩兵を「ほへい」と読む例は多く見てきた。筆者は40年近く子どもに将棋を教えている。初めて将棋に接した幼児層から本将棋を指せる、初心者から初級者にランクアップするまでの実践例と経験談を報告する。

1 駒遊びから覚える初めての将棋

- (1) ドミノ倒しで盤駒に親しむ
- (2) 山くずしで駒の価値を知る
- (3) 回り将棋で9×9の広さを知る
- (4) はさみ将棋で「手を読む」練習

2 本将棋の駒の利きとルールを覚える

- (1) 駒の漢字と利きの塗り絵

幼児にとって駒の漢字と利きは難関で補助教材が必須。筆者が使っているのは2種である。実際の駒文字を薄色に加工してなぞるものと、駒の利きを示した○を塗るテキストだ。手を動かして作業するのは記憶中枢の刺激と達成感の助長につながると考えている。

このとき駒は8種類しかない点を強調し「20、30もあったら先生だって覚えられないよ」と励ます。(テキストー1)(テキストー2)

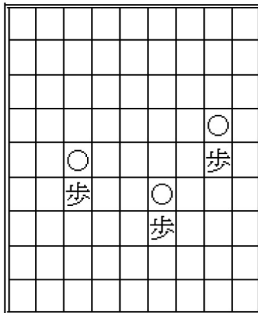
おなまえ



テキストー1

おなまえ

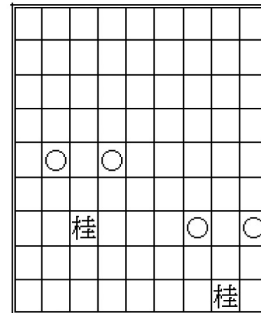
ふ ちから め
歩の力があるマス目



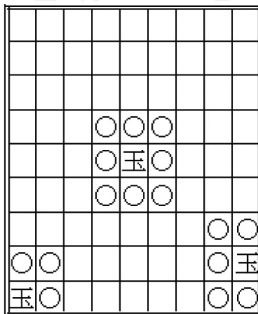
ぎょう ちから め
香の力があるマス目



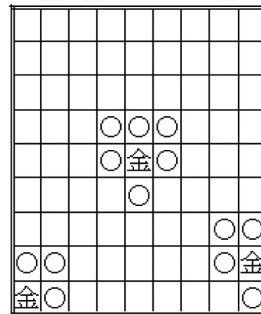
けい ちから め
桂の力があるマス目



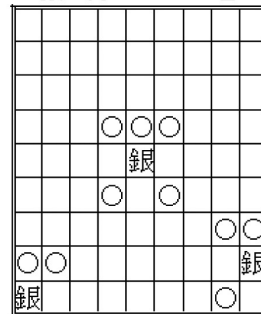
ぎょく ちから め
玉の力があるマス目



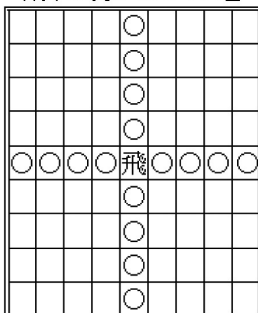
きん ちから め
金の力があるマス目



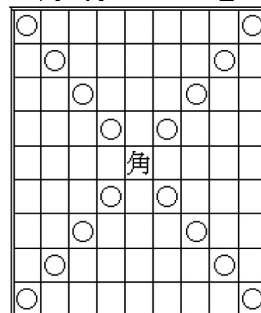
ぎん ちから め
銀の力があるマス目



ひしゃ ちから め
飛車の力があるマス目



かく ちから め
角の力があるマス目

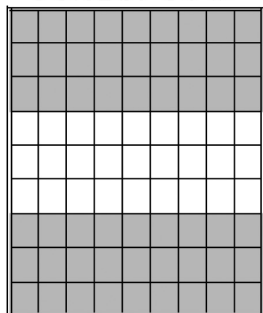


こま
駒のならべかた

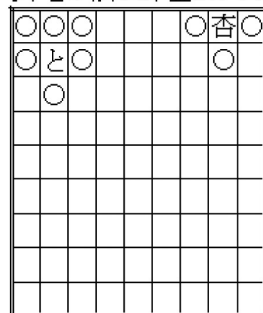


NO.1

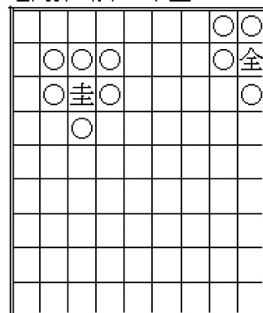
じぶんとかいてのくに



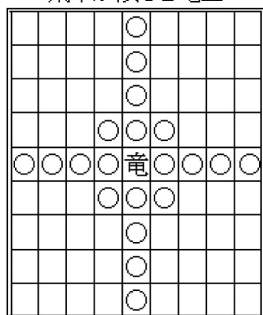
な
兵、香が成ると、金とおなじ



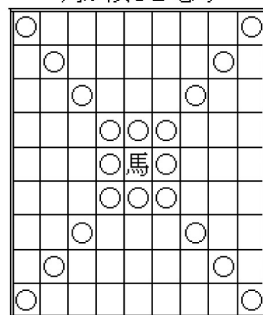
な
桂、銀が成ると、金とおなじ



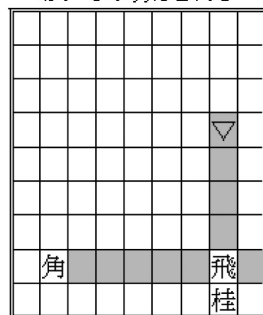
ひしゃ な りゅうおう
飛車が成ると竜王



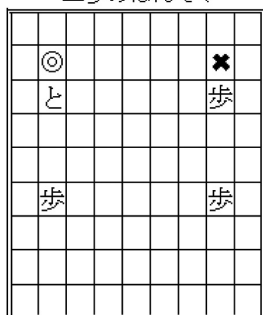
かく な りゅうま
角が成ると竜馬



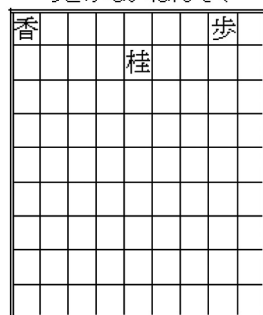
こま
あいての駒はとれる



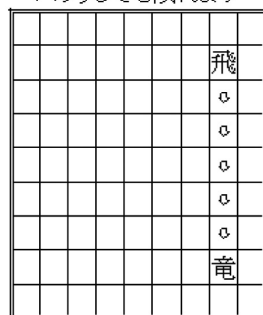
にふ
二歩のはんそく



うごけないはんそく



な
バックしても成れます



NO.2

テキスト 2

3 初心者から初級者へ導く指導

(1) 目配りはどこかを見る

サッカーでいえば自分の陣地を守っているだけでは点が取れない。これではよくて引き分け、相手が攻めてこないと分かれば総攻撃を仕掛けてくるだろう。

将棋も似た部分があり自玉を守っているだけでは相手玉を詰ませることができない。強くなれば受けて勝つテクニックも必要だが「5点取られてもいいから6点取りに行く」意識が必要だ。相手陣8自陣2の目配りができるようになると初心者から初級者へのアップとを感じる。

(2) 盤上と持ち駒を綺麗に並べる効用

盤上の駒と持ち駒をバラバラに置いていると、どこに利きがあるのか、なにを何枚持っているかが分かりづらくなる。駒をマスメに真っすぐ置く、持ち駒を強い順で扇形に並べるのは、礼儀というより自分に分かりやすくするためと教えている。

(3) 手は膝の効用

とくに子どもは相手の指す手を見ないで、待ち構えるよう駒を持っているケースが多い。相手の指した手を見て利きがどう変わったのか、を確認する時間を数秒でよいから持ちたい。

持ち駒をカチャカチャとさわるのも防げるため「手はお膝、指し手を決めて駒を持つ」を習慣づけておきたい。

(4) 3手詰めを2手詰めにする

詰将棋問題は1手から3手に進むと受け方の手も読むため難易度が格段に向上し、ここですみずくケースを多く見てきた。

そこで3手詰め解答の局面を盤上に並べて詰んでいるのを確認させたあと、2手目（1手目の王手がかかっている局面）に戻って受け方の手から考えてもらう。つまり実質2手詰めだ。

「本将棋の駒の利きとルールを覚える」では述べなかったが、この手法での0手詰めから1手詰めは詰みを理解してもらうのに効果が高い。

第3章 競技志向の学校将棋部の指導と生徒の上達について（古作 登）＊要約

3-1 10年に及ぶ指導データの記録

筆者は将棋指導法の研究を兼ねて、2008年から10年あまり関西地区の中高一貫校であるA校の将棋部に月1回ペースで指導に足を運び、現在も継続中である。

生徒の実力はアマ5、6級から五段以上の県代表レベル（将棋倶楽部24の2600点クラス）までさまざまだった。依頼内容としては個人、団体の各カテゴリーで中学高校ともに全国大会での優勝を目指すというもの。無論、県大会の優勝はその前提条件として高い確率でクリアしなければならない。ただし、指導が行えるのは限られた機会（ほぼ月1回・各3時間程度）しかないので、生徒が実力向上するには本人の努力が大半であるといっている。本項では、部活動の顧問などを務めていて将棋の実地指導もたまに行う指導者の参考になるとと思われるノウハウを紹介する。

指導対局は通常5面指しで行い、すべての対局の手合い割と戦型、大まかな対局の経過（逆転、下手に好手が出たなど）を表-1のように記録（名前は元データでは実名）した。こうした記録をつけることによるメリットは、以下のように考えられる。

まず、記録が残ることで1局の重みが増し、下手はもちろん上手もより丁寧に指す傾向になり、対局の中身が充実すること。次に、一人一人の生徒の個人データをきちんとつけていることを示すことで、生徒側がその場限りの稽古ではなく「長い目で丁寧に見てくれている」と思ってくれ、指導対局に熱心に取り組んでくれること。第3に、指導者側も生徒の癖を記録することで、どこを伸ばしていくかといった長期的な指導方針が立てやすくなることである。

表-1 指導記録の例

手合			手合			手合		
名前/日時	11/21		12/19			1/9		
E君						飛	×	四間美濃、上手位取り、仕掛けミス
M君			二枚	×	矢倉、堅実に攻めるも惜敗	二枚	○	矢倉端攻め、快勝
TN君	二枚	×	矢倉、居玉でうまく攻めるもボロ	二枚	×	矢倉棒銀、連打の歩うっかり		
TD君			二枚	×	左美濃棒銀、読み逃し惜敗	二枚	×	左美濃じっくり、読み逃す
H君	飛香	○	棒銀速攻で完勝	飛香	×	お神酒、下手庄勝形へドン死	飛香	×
O君	飛香	×	1七桂急戦粘り強く指すも惜敗	飛香	×	1七桂急戦へら八金左、惜敗	飛香	×
K君	角	○	中飛車攻めの強手で快勝	角	×	中飛車、中央乱戦、僅差の終盤		

限られた機会ではあったが、10年間で約400名近い「生徒のカルテ」をつけたことにより、伸びる生徒の傾向や、棋力の伸びるタイミングなどさまざまな経験側を得ることができた。こうしたカルテ作成は講師側にとっては手間のかかる作業ではあるが、長期間の指導を行う場合には、生徒側のやる気を引き出す意味でも有用な方法であると実感している。

3-2 指導の実際

限られた機会しかないので、実力が伸びているのに同じ手合いが続くと飽きられてしまう。よって駒落ちの場合2連勝すれば一段階上に進む（例・二枚落ちなら飛香落ち）やりかたで、生徒たちのやる気を引き出した。手合は六枚落ち、四枚落ち、二枚落ち、飛香落ち、飛落ち、角落ち、平手（下手先手）、平手（先手後手1局交代）の8段階。奨励会などで採用されている香落ちはハンデとしてハッキリした差がないと思われるため省いている。

中学1年生で二枚落ち（1級から初段前後）からスタートした競技志向（全国大会を目指す）の熱心な生徒が2年ほどで平手の手合い（アマ五段クラス）になったケースや、娯楽志向（将棋を純粋に楽しむ）でもアマ三段、四段レベルに達した生徒は少なくない。

指導に当たって心がけていることは、級位者や低段者にはできるだけやさしく、高段者ないしは高段を目指す生徒には厳しめに指すこと。またA校の指導では月1回と頻度が少ないため2連勝で手合を改める（例：二枚落ち→飛香落ち）方式が続けたため、1局目はできるだけ下手の力が出る展開（できたら上手が負けてあげる）、連勝がかかった対局では上手が最大限の抵抗をし、勝つことの苦しみを知ってもらう、というように上手の指し手の質を変化させた。このことは下手にも伝えてあり、生徒側は昇級の一番はそれなりの準備をして臨むようになった。

指導対局以外には、主に有段者向けに最新のプロの棋譜を基に流行の戦型の解説を行うこともした。

指導日に集まった生徒全員に指導対局ができるわけではなく、通常は5面指しの2回りで10人前後。長考派の生徒もいるのでこれだけで2時間から2時間半近くかかる。残りの時間（30分から1時間）で流行の戦型解説などを行ったが、並行して全員に向けた一般的なアドバイスも行った。序盤、中盤、終盤のほか、競技におけるメンタルの重要性についてもアドバイスした。解説とアドバイスの要点は以下のとおり。

◎序盤

得意戦型を持ち（できれば2種類以上）、詳細に研究する。良くすることよりも、まず悪くならない順（最低でも互角で中盤に入れる）をマスターし、相手にスキがあれば積極的に攻めていく手順をいくつか用意しておく。

駒組みが終了した時点（駒の損得なし）で評価値に大きな差（300点程度）がついている定跡形がいくつかあるので、そうならないよう（相手が知らなければ自分が有利な形に持っていくよう）、複数のパターンを示した。

◎中盤

仕掛けの方法をいくつか知っておくように指導。参考にするのはプロの最新棋譜や AI で分析した手順。プロの中盤における駆け引きや間合いの取り方など、形勢に差がついた局面の前後を中心に解説。

定跡とされている手順で、プロの実戦例で一方が圧倒的に勝ち越している局面を取り上げ、AI の評価値も示して解説。有利な側を持つよう（相手は定跡なので互角と思っている）に持っていく戦略を指導。

◎終盤

短手数 of 詰将棋（3 手～9 手）を級位者から有段者まで繰り返し行うことを推奨。それより難しい問題を解く場合は、実戦形の詰将棋問題集のほうが、はるかに効率が良いことを説明した。プロの実戦例から、終盤で勝敗を分けた局面を取り上げ、背景や考え方などを解説。指導対局でも勝敗に直結する「詰む、詰まない」がからんだ場面は、丁寧に感想戦でアドバイスした。

◎心構えとメンタルコントロール

指導者のこれまでのアマ全国大会やプロ公式戦などの経験（主に失敗例）を基に、どうやれば最高のパフォーマンスが発揮できるかをいくつかの要素に分けて説明した。

1. 自分の可能性を信じる

不可能と思われるようなことでも、目的を明確にして正しいと思われる方法でアプローチすれば十分に到達可能な目標であることを様々な成功事例を示し解説。A 校は全国でもトップクラスの学力を持つ生徒ばかりなので、学業での成功体験を将棋にも応用できるようアドバイスした。

指導者の経験では50代を迎えてもアマトップで活躍可能なこと、プロ棋士とも同じ土俵で十分戦えることなど、何歳になっても進化が可能なことを実例で示し解説した。

2. 技術と同じくらい精神や体調のコントロールが重要なことを伝える

スポーツの世界でもしばしば見られることだが、プレッシャーのかかる場面においては一流選手でも迷いが生じ、普段ならまずありえないようなミスをするケースがある。競技に必

要とされる要素には少なくとも技術面、精神面、身体面の3つがあることを伝え、盤上だけでなくメンタルやフィジカルも大会の時に良いコンディション、本来持っているはずの能力を十分に発揮できるように持っていくための技法をアドバイスした。

3. 大きな目標は小さな目標の達成の積み重ねで成り立つことを理解してもらう

全国大会優勝といった具体的な目標を掲げることは大切だ。だが、具体的にはアマ大会の場合には県予選から全国優勝まで状況に左右されるが県大会で6勝から7勝、全国大会でさらに6勝から7勝といった勝ち星が必要とされる。予選1回戦から数えると全国の頂点に立つまでは13勝ないしは14勝が必要だ。もちろん県予選の1回戦でも相手が四、五段クラスであることはごく普通なので、毎局がぎりぎりの勝負の連続、それを僅差で勝ち抜き白星を積み上げることで初めて目標に到達することができる。そのためには目の前の対局にフォーカスして「できることを確実にこなし」、結果としていま持てる力を出し切るのが最善の方法であることを理解してもらった。

4. 目標は言葉にして宣言し、実行する

対戦相手の調子や試合の結果など「自分ではコントロールできないこと」がいくつもあることを理解した上で、目標を言葉にして宣言する。そのことにより何をすればいいか、何をしてはいけないかを確認できる。このことにより、ふだんの練習対局も本番の試合と同じような気持ちで臨むことができる。

目標に関しては、むろん前向きの言葉で表現する。具体的には「全国大会ベスト8進出が目標」といった形でなく「序盤の研究を毎日行い、自分の実力を出し切る」といったように自分自身でコントロールできる形の目標を掲げてもらう。

5. 自分の長所と短所を知り、それを生かす

良い将棋が指せた時とそうでないとき、指導対局の内容などを踏まえ、その違いがどこにあったのかを知ってもらう。序盤の構想が悪かったのか、中盤の仕掛けが悪かったのか、それとも終盤で簡単な寄せを逃したかなど、具体的に指摘した上でミスが出た時の状況を思い出してもらい、それが技術的なものなのか精神的なものなのかを分析する。長所を伸ばすか短所を補うかについては、明らかな短所（簡単な詰将棋でも苦手など）は対応が必要だが、ベースは長所を伸ばす（得意戦法を磨くなど）の方向でアドバイスした。

6. 感情を極力排除することを学んでもらう

生徒に何度も繰り返し伝えているフレーズは「勝ちと思った瞬間が一番危ない」である。これは指導者が競技の場で経験してきた中で最も大切に思っている格言。理想はすべての感情を排除しコンピュータのようにひたすら最善手を指すマシンになること。そうはいっても人間には感情が存在するので、どうやって盤上に感情の影響が及ばないようにするかの技術をアドバイスする。具体的には冒頭にあげたフレーズ以外に、ミスしても自分に腹を立てない（怒りは敵）、自己否定しない（敗局＝失敗は成長のための必要条件）、どんな状況でも出来る最善を尽くす（勝利は目標ではあるが、結果ではなくそれに向かう姿勢が重要）、といったアドバイスをした。

3-3 指導者として棋力向上の必要性とその方法

前項で紹介したようなアドバイスは、級位者や低段者（三段くらいまで）はすんなり受け入れてもらえることが多いが、全国トップを目指すような生徒（五、六段クラス）に納得してもらうためには指導者が実際にそれを実践できるところを見せることも必要だと考えている。よって、A校の指導を引き受けて以降、筆者は40代半ばを超えていたがトレーニングを重ね積極的にアマ大会にも参加し全国大会に20回ほど出場、10代、20代の選手に交じって何回かはベスト4に進み、プロの公式戦にも出場した。どの指導者も競技者であり続ける必要はないと思うが、アマ高段者相手に5面指しで対局し、局後に的確なアドバイスをするのにはそれなりの技量が必要だ。また指導対局で見せるべき時に的確な技を見せられないようでは、高段者の指導は難しいのではと考える。筆者は指導を本業としていないため、練習対局の機会は月に1度あるかどうかでトレーニングの時間は限られているが、それを補ってくれた強力なツールが将棋AI（ソフト）である。

◎ AI を活用した勉強法

『将棋年鑑』などで棋譜並べをし、手順が気になったり棋譜の解説を疑問に思ったりした局面をAIにかけて評価値を調べる。定跡とされるような局面でも想像以上にプロ棋士が判断ミスをしているケースが多いことがわかり、同様の局面に進んだときどうやってとがめるか研究ノートに記し、研究手順は大会などで実践する。

ふだんよく指す戦型の序盤の手順をAIにかけ一手一手再検討。定跡書には記されていないような、思わぬところに相手のスキを突く鋭い手や、対照的に緩手が潜んでいて、長年信じら

れてきた「人間の常識」がいかにあいまいなものかを実感することができた。気づいた点は研究ノートに記しストックする。

大会や高段者との研究会で指した将棋はその日の夜に AI で検討し、悩んだ局面の評価値と、正しい指し方、また勝因、敗因をはっきりさせ、その時の精神状態（必要以上に楽観、悲観していないか）も含め大局観の修正（正しく形勢判断する）を行う。

上記のように棋譜並べ、定跡研究、実戦の復習のほか、日常的には生徒にも勧めているような比較的簡単な詰将棋を数多く解いている。将棋に接している時間は 1 日平均 1 時間程度だが、筆者はこれで 50 代になってもアマ全国レベル（2016 年支部名人戦西地区準優勝、2017 年アマ竜王戦全国 4 位、2018 年アマ竜王戦全国 3 位）の棋力を維持できているので、AI を用いた勉強はかなりの効果があるのではないかとと思われる。

第 4 章 「川崎こども将棋教室」における指導法の推移とその背景

（川崎 一克）＊要約

4-1 はじめに 初期の指導法と失敗に学ぶ

私は 20 年ほど、大阪でこどもに特化した将棋講師を生業としており、指導内容ならびに将棋教室の運営についての試行錯誤を続け現在に至っている。

講師を始めた当初（特に開始 5 年間）は、プロの養成機関を辞めたばかりという事もあり、指導内容も 1. ひたすら棋譜を並べる。2. 1 手 10 秒で判断する将棋の練習をさせる。といった、ハードな内容ばかりを行っていた。自分の修業時代に師匠である森信雄七段に教えてもらった内容をそのまま生徒に取り組ませていたのであるが、小学生には特に厳しすぎる内容であり、よくぞ子供たちは付いてきたものだとは今では反省している。

省みて良かった点は、熱く生徒に接したこと。損得勘定抜きで生徒に自分の時間を投資したこと。指導している子全員の事を考えない日はなかった。

悪かった点は、講師として練習内容を組むノウハウが極端に足りなかったため、摘む必要のない才能を容赦なく切ってしまった事だと思う。

その頃の教え子からは千田翔太七段など全国入賞するような強い教え子を輩出でき、自分の指導内容があたかも正しいかのような錯覚をしていた。しかし、初心者層の定着にかなり失敗

を続けており（指導内容を鑑みれば当然ではあるが当時は理解できていなかった。）東京の小田切指導棋士六段のやりかたを参考にすべく、氏が教室 HP で公開している指導方法を真似することにした。

小田切先生の教室 HP 「おにぎりころりん」は、当時小1くらいの実娘さんのかわいすぎるコスプレから始まり、「歩なし将棋」「将棋のルール説明テキスト・三段目に入ると駒は進化する」といった内容であったが、自然体で父性や母性、また成功体験を生徒にさせようという姿勢があり、当時の私には衝撃的であった。将棋の勝ち負けは目に見えてわかりやすいが、習いに来る生徒の満足度や教育の成果は見えにくい。普及する講師として一番重要な間口の広さが大敗していることはよく理解できた。大袈裟ではなく、この気づきは自分の中で大きな転機であった。

以降15年間は、年を重ねた分もあるが、他の分野の講師業の方々の講義も参考にし、体系的な知識の指導には「マインドマップ」、保護者からのヒヤリングのための「カウンセリング技法」など現在では総合的な指導方法を意識して構成している。

4-2 教室をとりまく動向などについて

1. 平成10年4月に吹田市在住の後援者の方からの要望で「千三こども将棋教室」を開講した。生徒数1名からスタートし、現在で21年目になる。開講当時は、「こどもからお金を取るなんて」という意見も多くあり、習い事としての将棋は大阪ではまだ根付いていなかった。初期の生徒たちは30代にも達し、今では応援してくれる存在になっている。情操教育に力を入れる地域という事もあり、伸びしろはかなりあるが、部屋の広さの問題もあり現在は25名定員で募集は打ち切っている。

2. 緑地公園の教室について。平成12年より千三教室から分派する形で「てらうちこども将棋教室」として開始し、生徒数8名からスタート。当時は、豊中市寺内地区自治会の管理する「寺内会館」を月2回借りて開講していた。平成14年の完全学校週休2日制の導入に伴い、北大阪急行線、緑地公園駅前にテナントに場所を移し土日のみならず平日夜間も開講する形式をとった。平成14年からは、デフレ脱却からのいざなみ景気に支えられる形で生徒も増加し、岡山県、滋賀県など遠方からも毎週通う子も複数いたが平成20年のリーマンショックを境に遠方者の減少がかなり見られ、商圈に大きな変化があった。

零細かつ個人を顧客にしているために景気の影響を最初に受けることを非常に痛感する。

平成17年4月生徒数70名。平成20年100名。平成31年2月現在は140名ほど。

私自身の経営する教室の総括としては、現在は閉鎖した教室など含めると、最大時には、250名を超えていた。（平成27年4月時点）。

藤井ブームなどで小学生以下を対象としたJT杯こども将棋大会の参加者が増加しており、（平成30年10月に開催された大阪大会においては大阪市立体育館ホール・1700名の定員を超え、参加できない子が多数発生した。）将棋に対するこども達の需要が大きくなったのが見て取れるが、私自身の教室では、横ばいから微増程度である。※東京では満員御礼で困るくらいとの事で、微増程度と言うと驚かれる。

以上を考察すれば、①将棋教室自体が大阪府全体に増加したこと。②他の大手塾による低年齢に対する囲いこみ戦略③在籍者層と地域単位での少子化、といった以上3点の影響を受けていると考えている。

4-3 指導内容の全体像

指導カリキュラムについての項目は大きく分けて下記の11項目である。また今回本文では、その11項目について書かせて頂くが、本章では前提の条件として、将棋の段と級について記す。

指導カリキュラム全体像

1. 園児（将棋の導入など）
2. 初心者（18級から12級）
3. 下級者（11級から6級）
4. 中級者（5級から1級）
5. 上級者（初段から三段）
6. 上級2（四段以上）
7. 伸びる子と伸びない子の違い
8. クラス編成について
9. 平手の指導について
10. 将棋倶楽部24 ネット将棋など
11. ソフトの使用方法

◎教室における級についての具体的な基準

1. 園児（将棋の導入など）

- 24級 盤の前に座れる 相互理解ができる
- 23級 5枚将棋ができる
- 22級 歩・桂なし将棋ができる
- 21級 歩なし将棋で ①角で王手ができる。②王手回避できる
- 20級 歩なし将棋で 桂で王手ができる。
- 19級 10枚落ちができる。①飛、角がなれる。②詰みの理解

2. 初心者（18級から12級）

- 18級 10枚完勝。②詰みの理解（竜・馬までできる）
- 17級 平手で戦法の概念と、駒の役割が理解できる。1手詰めが早く解ける。
- 16級 かに囲い+棒銀 戦法が使える。（低学年には大型認定証）
- 14級 すずめざし（8枚落ち）での数の攻めの理解ができる
- 12級 平手で他の子に勝てる（実戦で詰ますのが狙い）

3. 下級者（11級から6級）

- 10級 講師に8枚落ちで勝ちきることができる。
- 9級 他の戦法を伝授→使うことができる。講師手合いは7枚落ち（71銀）
- 7級 3手詰めが解ける（ハンドブックレベル）
- 5級 7枚落ち（31銀）で川崎先生に勝てる。（大型認定証）

4. 中級者（5級から1級）

- 5級 初級での3級が中級の5級と同じ。2級落ちる。
 - 1級 将棋会館と同じ・将棋ウォーズともほぼ同じ基準と思われる。
- 初段格 11勝4敗とると川崎先生の4枚落ちに挑戦。
- 平均で7回挑戦しないと初段になれない。（上手が本気で15分30秒なのでかなり厳しい。）

5. 上級者（初段から三段）有段者は原則12勝4敗。

- 初段 川崎2枚落ち

三段 川崎飛香落ち

6. 上級2（四段以上）

四段 川崎飛車落ち

五段 川崎角落ち

4-4 レベル別の指導内容と目標

ステップ1. 園児（将棋の導入など） 24級から19級まで

24級 盤の前に座れる 玉1枚の将棋 相互理解ができる

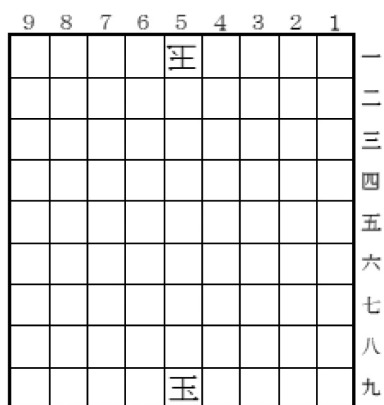


図-1 玉1枚の将棋

教室では、年中の4歳から受け入れているが、マンツーマンでの指導も必要とするために各時間帯に1名程度での参加を認めている。

年中の授業では①25分程度の取り組みであること。②母親との連帯が必須。であり、この2点について、理解を頂かないと教室側の負担が極端に増えるばかりで教育効果も多くは望めない。

23級 5枚将棋ができる

5	4	3	2	1	
銀	金	王	金	銀	一
					二
					三
					四
銀	金	王	金	銀	五

図－2 5枚将棋

図－2のような玉金銀のみの5×5の将棋を行い、相互に駒を動かすことを指導する。

※駒が増えた達成感が重要。

※母親にも取り組んでもらう。

※金銀の動きは玉と同じに周囲1マス動ける。

相互に駒を動かす認識と駒を取る練習がテーマ。また、家庭でも親子で取り組んでもらい、親からの将棋に対する肯定を子供に伝える。(長い目で見てかなり重要)

22級 歩・桂なし将棋ができる

23級と比べると将棋の内容はかなり高度になるが、目標テーマはほぼ同じ。

小さい車→香車 大きい車→飛車 妖怪→角と指導している。

また、日ごろの幼稚園や他の習い事の知識と横断できると判断すれば、その知識ともリンクさせる工夫が必要。

桂馬を入れない理由は動きが変則的なため。この段階で置くと知識が混同しやすい。

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
△	皇		飛	王	金	銀	金	銀	皇	一
		飛							角	二
										三
										四
										五
										六
										七
		角							飛	八
	香		銀	金	王	金	銀		香	九
										▲なし

図－3 歩・桂なし将棋

21級 角の使い方

22級と同じく、歩・桂なし将棋に取り組むが、角を使って遠くから王手ができるようにすることが目標。低年齢の子は図形力によって、ななめの図形のゆがみがあるため、遠くからの角の王手が難しい。未就学児でここまでくるとかなり順調。

20級 歩なし（桂を追加）

年長2学期程度の子の上位者同士の対戦は、詰み50パーセント、桂の王手50パーセントで決着する。桂の王手は相当わかりにくい。

王手に関しては桂が大活躍するが、この段階では、空き王手までは目標に入れない。追加として、この段階の初心者と、高学年の上級者を対戦させる。上手側からみても教える経験をすることコミュニケーションを学ぶ題材となる。

また、この段階になると「詰み」の理解もできるため、詰将棋のプリント教材も活用する。

◎詰みの理解の最初の段階の説明

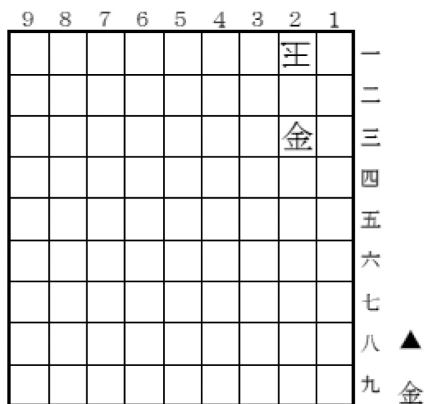


図-4

詰将棋の理解については、図-4のような1手詰みの基本形から練習する。

特に「金を玉で捕まえる」問題を多く解かせる。

19級 10枚落ちができる。①飛、角が成れる。②詰みの理解

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
				王					一
									二
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	三
									四
									五
									六
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	七
	角						飛		八
香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香	九

図－5 10枚落ち

ストーリーとしての理解を目標とする。10枚落ちで効率よく勝つには

① 角を成る ①飛車を成る ③ぶつかった歩を取る ④竜と馬の連係でつかまえるといった4つのテーマがある。これは園児には相当に難しい。

上手としての取り決めは、3段目以上に玉が上がらないこと。駒落ちの場合は玉が上段に上がるほど捕まえにくいため、難易度を不用意にあげない。

ステップ2 初心者 18級から12級まで

18級 10枚落ちで完勝できる。②詰みの理解（竜・馬までできる）園児用扇子贈呈

19級の項目でのべた10枚落ちをしっかりと勝てるようになることが目標。竜と馬の連携をさせることが難しい。また、ご家庭での復習の時間なども必要となるため、この段階でつまづく場合は、講師と父母とのコミュニケーション不足の可能性が高い。詰将棋は得手不得手もあるがどんどん解かせる。ここまで園児指導を中心に書いたが、小学3年生くらいだと、実質ここからスタートの子が多い。

17級 平手で戦法の概念と、駒の役割が理解できる。1手詰めが早く解ける。

考えさせる訓練として、駒の価値の授業を行う。例えば、「銀は5か所に動ける。6か所動行ける金は銀より強いから7。」「角は16か所、飛も16か所。同じに見えるけど、角は盤の隅にくくと8か所しかいけない。飛はどこにいても16か所。だから飛のほうが強い。」など、理屈を考

えさせる題材になる。

この段階の習得度は、詰将棋は1手詰の基本問題を7割正解できるレベルである。

16級 かに囲い十棒銀 戦法が使える。(低学年には大型認定証)

戦術として、「囲い」「攻撃陣」を作る事ができる。また、棒銀の基本手順が行えること。

未就学児の達成目標であり、ここまで到達したら特別に賞状を授与している。日ごろから実戦をしていない子はこの段階で止まる子が多い。

15級～12級 実戦に取り組む スズメ刺し(8枚落ち、数の攻めの理解)

今日習った内容を家族に話をする(言語化する)という指導をこの層にはしている。保護者からの学習の見える化と、本人にとっての復習。モチベーションづくりなど。また、講師の立場からは、こどもへの声かけの例として、直近のこども達の関心事も聞く時間をとる。

コミュニケーションと、学校で習っていることとの関連付けなどに活用できる。

①実戦を多く指すこと、②3手詰にも挑戦すること、③活字に対する力もいるが、自主的に将棋の本を読める事。以上3点を大きな指導目標としている。

ステップ3 下級者 11級から6級まで

11級レベルに到達すると一定の理解度ができるため、指導内容にも幅ができる。

講師としては、①平手の練習②駒落ちの練習③自分での学習、という3つのカテゴリーで各々の生徒がこういったテーマに取り組んでいるかの把握が必須である。

新しい戦法を学ぶことは、本人の知的欲求を刺激できるためモチベーションに対して有効であり、戦法にあわせて、講師側が作成した**推薦図書一覧**があり、それを見て購入してもらう。

◎詰め将棋を解く

1手詰めハンドブック・3手詰めハンドブック(浦野真彦八段・著)などの基本問題をともに2周解いた後に、上下入れ替えて解かせる。(下の図面のように本を逆さまで解く)同一性の認識がなくなるため難易度が高くなり、また自分の玉の詰みを読む練習にもなる。学習効果は高い。

◎棋譜並べ

速さをもって一局の将棋を並べる。1局（110手程度）の目標が7分30秒（5級平均）程度である。指導方法としては、1、棋譜を2手ずつ並べること。2、棋譜の「▲2六歩」を「▲2〇歩」と認識させ練習させること。

◎平手で指導する場合

下手に攻めさせる、形勢はやや下手よし程度の局面を保つ。局面が悪いと手の選択が狭くなるために下手からみた負荷がきつい。相手の指してきた手とほぼ同価値と思う手を選び続ける。

※一定の技術が必要で、ここをうまくできない講師が多い。いつのまにか上手の玉が堅くなっているケースが多く、これでは下手にとってきつい。

◎メディアを活用する

現在ではNHKのみならず、多種多様な媒体において将棋の情報があふれている。それらは子供たちはもとより周囲の大人にとってもありがたい限りである。特に昨今の藤井聡太七段のニュースや、それに加えてさまざまな映画、アニメ、ドラマまで次々と作品が作られている。反対に、今以上に将棋界を知ってもらう機会が増えることが今後あるのか心配になるほどである。

ステップ4 中級者 5級から1級まで

5級～1級 原則として、理解度も高い水準に達しているため、勝敗での明確な昇級基準を設けており、昇級の規定は9勝3敗で昇格する。

教室では時間帯により、初級の部、中級以上の部とわかれている。同一の教室ではあるが、初級での3級が中級以上の5級になる様に設定しており、2級落ちる。（これも級のインフレを防ぐために設定している。理由としては、勝ち星で段級を認定する形をとると、こども教室ではインフレしやすいためである。

初段格 11勝4敗とると私（川崎先生）との4枚落ちに挑戦。勝てば初段に昇段できる。

平均で7回挑戦しないと初段になれない。（上手が本気でかつ、持ち時間も15分30秒なのでか

なり厳しい。)

◎中級者に対する指導法 戦法について

各戦法のテキストでは、陣形の強さを5段階で指導している。

相矢倉の場合

レベル5 最強 飛先不突26角型矢倉崩し

レベル4 強い 36銀 37桂型

レベル3 普通 46銀 37桂 38飛

レベル2 弱い (レベル1に準じる)

レベル1 とても弱い 棒銀

実際にはここに、雀刺し、後手53銀・73角型、急戦矢倉 などを入れて体系化して指導する。(しかし、奔放型の子は理論＝座学の段階で結構つまづく。)

ステップ5 上級者 初段から三段まで

小学生でこのレベルに達すると十分な習得度であると感じる。ただし、全国大会での入賞を目指す場合は、小学1年生で初段くらいは最低でも必要なのではないかと思う。

有段者の指導については、①手合いの付け方 ②理論の授業 ③手の損得勘定 ④本の読み方 ⑤詰将棋を早く解く ⑥棋譜並べ高速 ⑦棋譜並べ低速 ⑧作戦としての具体策の以上8点で構成している。

◎理論の授業

座学を行い、一局の将棋に対する方針の決定についての授業を行い、生徒には具体的な意見を述べさせる。以下に示す表は基本だが、当然例外も多く発生する。

1. 方針の決定について

「緩く」		「激しく」
駒得	⇔	駒損

位を取ったら ⇔ 位を取られたら
手損 ⇔ 手得

2、手の損得計算

図面をぱっと見て、先手後手が初手より何手ずつ指しているかをそれぞれ計算する。手の損得計算を早くするための練習。

3、本の読み方の指導

定跡書 1 冊の内容を40分くらいで頭の中で整理するための方法を指導する。目次を軸にしてツリー作成をした上で、手順と結論をマインドマップで図形化していく。定跡手順を覚えることとたくさんの書籍に目を通せるため知識量が目に見えて増える。ただし、学習全般の経験や活字に極端に弱い子は手間がかかる。

4、「詰将棋パラダイス」など専門誌から15手以内程度の詰将棋の取り組み

メリハリと緊張感を持たせるために、思考時間を10分程度に決めて取り組む。

5、棋譜並べ高速

1 局並べるのに 3 分程度の速さで数をこなす。同じ戦型でまとめてなどの工夫をする。下級者から頑張っていた子はこの段階で学習効率に差が出る。

6、棋譜並べ低速

局面を見て 3 つ手を思い浮かばせそれでも見えない手は○を入れて後から見直す。三段以上になると効果が大きい印象。

7、大会などで用いる作戦の具体策

20年間教室を行っていると過去の OB が使っていたオリジナルの戦法も相当数ある。流行で埋もれていたものも数年経って使える手順も多い。再活用できる場合は具体的な手順を教える。

ステップ6 上級2 四段以上

高校生を含め四段以上のレベルは大阪府下でも十分上位である。このレベルになると、行うことは下記の4点のみである。

1. 上級者の項で示した、テーマの徹底。
2. 局面に関する相談、検討
3. 練習内容の組み立ての指導など。(なぜ、この練習内容をするのかなど)

※次の大会のルールを踏まえなど

4. 駒落ち上手の練習。(指し方の幅がかなり広がるため)

4-5 伸びる子と伸びない子の違い——20年の指導経験から感じたこと

◎成長時期の違いなど

一人の生徒の成長段階においても、「伸びる時期」「伸びない時期」がある。表面上こういう子だから「将棋に向いていない、向いている」と早い段階で判断するのは講師として指導力が低い。こどもたちは、心身の成長への糧を、学校生活や家庭生活など多くの事象から受けている。そうした中で将棋教室での指導を受ける時間はわずかであり、将棋の指導だけでは、「伸びない時期」を回避することは難しい。講師から環境への働きかけは難しい面もあるが、多くの達成感や成功体験を得られる取り組みにしてほしい。

◎生徒の年齢ごとの特徴

1. 小学校低学年の場合の特徴

自分で試行錯誤、実戦では考えない自由奔放型は、考えるタイプよりも自己表現を楽しむため先行して伸びる傾向にある。ただし、理論的な組み立てができないため、二段で止まる子が多い印象。これを回避するためには、「活字に対する読む力」をつけて、本を読むなどのインプット作業に強くなる必要がある。また言語能力はかなり重要で、日常生活の言語化「昨日、何があったか」「盤面で行ったことの言語化」と将棋の理解度は比例しやすい(実際に人に伝えるかどうかは、性格にもよるので別の問題である)。

2. 小学校高学年の場合の特徴

個人差はあるものの、心身の成長期であるゴールデンエイジに入るため、一定の関心が

あれば、初級者から⇒3級や2級から⇒三段などに一気にあがることも多い。

◎伸びない時期

タイプ1．将棋の到達度に対して、基礎学力が低い

タイプ2．熟考型（女子に多いように感じる）

※目標設定を三段として考えると変わらないため、「伸びない時期」とするべきか正確には、難しい。時間制限のある大会では勝ちにくい、モチベーションがあがりにくい。考える力は財産なので他の分野では確実に生きると思う。

ただし、熟考しているのか防衛機制で考えているようにみえるのかは講師側の判断が必要。後者の場合は原因の除去に努めるべき。

タイプ3．盤面で行ったことの言語化が弱い。（自己肯定感が低い、防衛機制がかかっている可能性がある）

タイプ4．親による優先順位の提示（塾優先など）

4-6 クラス編成について

各クラスは、定員25名で講師1名から2名で運営している。原則として、講師1名で見られる範囲は、私の場合17名程度（全部の将棋を見ながら後で再現でき、かつ多面指しできる範囲、ただし机と椅子の教室形式のみ。）18名以上でも表情や動きは見えるので授業形式であれば生徒が40名でも問題は感じない。

緑地公園の教室は畳で座る形をとっているため、3面指しを行うとかなり講師の範囲が狭く、講師が自ら指すよりも、生徒同士の将棋を見てアドバイスする形のほうが効率が良い。畳の場合は、多面指しを指導の内容として組み込む場合は、パフォーマンスにしかすぎない。それがプラスの場合には行うが、講師一人体制では、生徒に目が行き届かない。

そういった意味では、指導効率は机椅子＞畳 であるが、和室の教育的な効果もあるため比較は難しい。クラス編成は、教室講師と保護者との相談で決定する。

第5章 将棋教室の可能性と指導法の今後（古作 登）

5-1 成功している将棋教室の共通点と可能性

筆者はこの10年あまり、北海道から沖縄まで全国各地のさまざまな将棋関連施設を訪問、調査してきた。訪問先は教室ばかりでなく将棋道場や将棋の盛んな地域のイベントなど、多種多様だったが、将棋教室が経営的にも成立している地域は将棋大会などが頻繁に行われていて将棋人口が多く、またリーダーである指導者や教室運営に携わるスタッフが熱意に満ちているという共通点があった。

青森県では毎週のように地元紙が後援する県連主催の将棋大会が行われているし、北海道では支部連合会が運営する自前の「北海道将棋会館」が存在する。南の方にも福岡県など将棋の盛んな県は少なくないが、最南端の沖縄県・石垣市にも将棋教室が存在する。写真－1が石垣市の市街地中心部にある「八将館こども将棋教室」である。



写真－1 将棋教室の外観

個人の住居の一部を教室として利用するため改造している。南国らしい作りの建物で、こども教室は週4日開講。スポーツなど、ほかの習いごとと並行して将棋をする子供がかなりいる。

教室主催者の石垣長武さん（石垣市出身）。長年勤務していた首都圏でも全国レベルのアマ強豪として活躍していた。生まれ育った地に戻り、将棋教室を開いて6年目を迎える。写真－2の教室の参加者の名札を見てわかる通り、生徒は30数名。中には高校竜王戦の沖縄県代表になった強豪もいる。石垣さんは「島で有段者100人を育てたい」と話していた。



写真－2 教室の受付に座る石垣さん

教室の中は写真－3のように畳敷きの部屋と椅子席に分かれていて、大盤もある。20名弱が同時対局可能で、筆者が訪問した日はプロ棋士の指導が行われるということもあり25名ほどの参加者で教室は満員だった。

石垣市は沖縄県南西にある八重山諸島の石垣島にあり、人口は5万人弱。それでも日本将棋連盟の八重山支部が、前身の将棋同好会時代から40年の歴史を持ち将棋のファン層はかなり手厚い。2018年11月に現地で行われた「第10回八重山将棋まつり」（年1回開催）のイベント来場者は沖縄本島からの参加者、児童・生徒の保護者も含めて約100名、棋士、女流棋士の指導も行われ、離島のイベントとしてはたいへん立派なものだった。

このように、一定数の将棋ファンの存在と熱意のある指導者がいれば、人口の少ない離島地域においても将棋教室は十分成り立っていくと思われる。



写真－３ 教室にはたくさんの棋書が常備され、棋士の色紙が飾られている

5-2 指導法はどう進化していくのか

将棋の指導法にはスポーツの指導法のようなある程度確立されたマニュアルはなく、当然「これが絶対」といった方法も存在しない。とはいえ本稿で紹介した指導法は、それぞれの指導者が成功や失敗を踏まえた長年の経験に基づき作り上げたものであり、少なくとも何らかの有用性があるものと思われる。

将棋の技術的な面に関しては、高段者やトップアマ（もしくはプロ）を目指す層には第3章で取り上げたように、今後はAIを用いた勉強法が積極的に取り入れられるようになっていくだろう。一方、入門者や初級者に関しては人と人のコミュニケーションの重要性が増していくだろう。強くなること、勝つことは無論大切だが、盤上を通じて対局者同士が対話できるレベルにどう導いていくか、将棋を生涯の趣味にしてもらうにはどうすればよいか、など指導する側の人間力が必要とされる。こうした心理面からのアプローチは競技レベルでのメンタルコントロールを含め、大いに進化の余地があるので今後も継続的に調査、研究を行っていく予定だ。

【参考文献】

- 小田切秀人『将棋の教え方学び方』、毎日コミュニケーションズ 2002年
- 北尾まどか・藤田麻衣子『どうぶつしょうぎのほん』、幻冬舎エデュケーション 2010年
- 北尾まどか・川崎智秀・藤田麻衣子『どうぶつしょうぎQ 1 キャッチと王手』、幻冬舎エデュケーション 2011年
- 北尾まどか・川崎智秀・藤田麻衣子『どうぶつしょうぎQ 2 王手と詰み』、幻冬舎エデュケーション 2012年
- 古作登・川崎大地・寺谷睦「子どもとおとな、将棋能力の学習と発達——どのように学ぶか、なぜ子どもは伸びるのか、大人でも早く上達することは可能か」、『子どもと発達発達』、日本発達発達学会編 p.179 - p.183、杏林書院 2015年
- 産経新聞朝刊「棋士列伝」囲碁・古谷裕 八段 2018年7月27日
- スポーツ報知「ちょい負け名人」カリスマ指導棋士飯島篤也さん 2018年9月10日
- 日本生産性本部『レジャー白書2018』、(公財)日本生産性本部 2018年